

耶 麻

令和6年度 第3号
[通巻 139号]
耶麻地区小学校長会
令和7年2月17日

巻頭言

「憂鬱な年度末」

耶麻地区小学校長会副会長

喜多方市立塩川小学校長 樋口 喜敬

いよいよ組織打ち合わせ。今年の人事は？誰が残るのか。6年担任は。1年担任は。でもうちは、4年生が大変だからな。エクセルで整理して、並べ替えてみよう。校務分掌も表で整理しよう。「絶対にできない」という人が出てくるからな。あーうっとうしい。・・・心の声である。

年度末に毎年頭を痛める。担任や校務分掌を2つ返事で引き受けてくれる人は、少ない。異動してくる人は、文句は言わないが、その人に大変な学年や校務分掌を持たせるのは、後々問題が起きかねない。賭けみたいになってしまう。新しい学校に慣れるのに大変で、休みを取るようになるかもしれない。それは何とか回避したい。

校務分掌を発表した後に、「私はこれはできません。聞いていませんでした」という声が出てくる。それも避けたいので、私はここ数年、4月の1回目の職員会議で発表した後に、「これは仮です。この後学年主任会で確認します。何かある方は学年主任へ話しておいてください」とワンクッション置くようにしている。それほど変更はないが、どうしてもという場合は、やぶさかではない。逃げ道を作るようにして、先生方も話を聞いてもらえると思ってもらうようにしている。ずるいかもしれないが、年度当初から職員ともめるのはとても嫌で、気持ちよく仕事を進めたい。もちろん教頭や教務主任にも事前に充分相談してから発表している。

一度決めた担任と校務分掌は途中で変えるわけにはいかない。全員が納得して仕事をしてもらうのが一番だが、なかなか難しいので、でき

るだけ納得いく形で進めていきたい。・・・本当に憂鬱である。

一年を振り返って

「笑顔は教師の力量」

喜多方市立関柴小学校長 佐藤 潤
中学生の時、あるドラマを観ました。

「我々はみかんや機械をつくっているんじゃないんです。毎日、人間をつくっているんです。人間のふれあいの中で我々は生きています。たとえ、世の中がどうであれ、教師が生徒を信じなかったら教師は一体、何のために存在しているんですか。お願いします。教えて下さい。」

という主人公である教師のセリフに頭に雷が落ちたかと思うほどの衝撃が走りました。ドラマの世界でしたが、きっとやりがいがある仕事になるのではと思い、教師を目指すきっかけとなりました。

平成3年、教師生活がスタートしました。不安の中の学級担任でした。不安は的中、うまくいかない授業、終わる気配のない仕事、教師に向いていないと自問自答の毎日でした。特に、担任していた子どもから

「もっと、マシな授業してください。」

と言われたことは、今でも夢に出てくる忘れられない思い出の場面です。

当時「笑顔は教師の力量」という言葉が鏡に貼られていました。その時は、自分自身に余裕がなく笑顔など全くありませんでした。

そんなとき、校長先生、学年主任をはじめ、教職員の皆様のサポート、アドバイスをいただき、何とかやってこれたと今でも感謝しています。おかげで、笑顔で学級経営に全集中することができました。

今、自分にできることは「教職員を伸ばすことと、子どもの持っている力を最大限に引き出

すこと」であり、それが、今までお世話になった皆様に対する恩返しであると、心から強く思っています。

令和6年4月1日、喜多方市立関柴小学校の鏡に次の言葉を貼りました。

「笑顔も教職員の力量」

一年を振り返って

「今こそ知恵を絞って」

喜多方市立熊倉小学校長 武藤 盛男

今年度は、教職員はもちろん保護者や地域に対しても学校の働き方の意識改革を進めてきた1年であったと感じます。校内では「業務改善会議」等を開催し、子どもを真ん中に教職員主体で知恵を出し合い、チームで改善を進めてきました。教職員へのアンケートなどによると、業務改善が必要と感じる内容は様々と感じましたが、一つ一つの意見を大切にしながら魅力ある学校づくりのため、前例にとらわれず見直しを図ることで、働き方や学校は変えられるとの思いを共有できたと思います。

そのためにも話し合った結果をしっかりと教育計画等に反映し、実のあるものにしていくことが大切です。さらに、年度途中でも改めるべき所は改める姿勢や柔軟さは今後も重要です。

また、PTAや学校運営協議会などと連携し、子どもを真ん中にした課題の共有は欠かせません。近年PTA会員が減少傾向であることから、持続可能なPTA組織の在り方も喫緊の課題です。PTA事業の集約化だけでなく新しいことを生み出す視点を大切に、保護者や地域とも知恵を出し合いながら、どのような学校を創り上げていきたいか、基本に立ち返って話し合いを続けています。

その際、役立つのは前任校での閉校・統合という一連の関わり中で、新しいものを生み出してきた経験です。働き方を見直すということは原点に立ち返り、創造するチャンスでもあります。校長会の横のつながりも欠かせません。まだ途上ですが、自校の課題を見極め、これまでの知見を生かし、知恵を出し合い、魅力ある学校を生み出す歩みを着実に進めていきたいと思っています。

一年を振り返って

「地域と共にある学校」

喜多方市立駒形小学校長 佐藤 孝宏

私は、常々、目指す学校像として「地域とともにある学校」を掲げている。学校と地域の人々（保護者・地域住民等）が目標を共有し、一体となって地域の子どもたちを育てていくことは、子どもの豊かな育ちを確保するとともに、そこに関わる大人たちの成長も促し、ひいては地域の絆を強め、地域づくりの担い手を育てていくことにもつながると考えているからである。

4月に駒形小学校長になって約1年、まさに、「地域とともに」を日々、実感している。全校児童60名の小規模校、朝の登校見守り活動、春先の田植えから始まり、年間を通じて多くの活動に保護者や地域の方々の温かな支援がある。PTA、学校運営協議会、農業科支援員、見守り隊、こまがた元気会、駒形公民館、雄国山麓ゆめクラブ、そして今年度発足した駒小応援隊など、地域の方々との連携がたくさんあり、子どもたちは多くの方々に支えられ、地域から大切にされ、育てられている。私は、そんな関わりのできる地域の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいである。

「地域とともにある学校」は決して学校を支援していただくだけの一方向の取組でない。地域と学校が双方向に協働するような働きかけがとても大切だと考えている。そのために、教職員や子どもたちと知恵をしばって、魅力的な地域「駒形」が、さらに輝くよう尽力していきたい。



一年を振り返って

「先を見て！」

西会津町立西会津小学校長 齋藤 勝芳
カズこと三浦知良がJリーグで光り輝いていた頃、週末はスポ少の練習と大会の日々でした。いつも「小学校の校庭が芝生だったらもっとサッカー好きが増えるだろうなあ、芝生に寝転ぶ校庭があればなあ。」と願っていましたが、陸上練習も必要であり無理な話だとあきらめていました。春に西会津小学校に転勤すると、校庭は芝生でした。しかも、隣接する中学校の前には全天候型のトラックがあるのです。業間や昼休みには、子ども達が必ずサッカーをして遊んでいます。つい見入ってしまいます。この他にも、木のぬくもりが感じられる校舎、一階にある滑り台、校舎内にある町図書館、中学校PC室には3Dプリンター、ミネラル野菜の給食、実効ある園小中連携事業など自慢が数多くあることがわかりました。

さらに、西会津小中学校の人的・物的環境を小中別なく活用し、授業だけでは学べない多様な学び（探究、ふるさと未来、世界交流、健康スポーツ、自然体験）を目指した「西会津学び合いランド」がスタートしました。これは、地域の方々との交流も目的としているものです。

この文教地域とも呼べる環境には多大なる財政支援がありました。町の未来を担う児童・生徒への投資です。今後益々、少子高齢化が進む中、今の大人が世話になるのが今の子ども達世代です。先が見通せない時代であり、認知能力育成同様に求められていることが非認知能力育成です。その土台となることが体験（交流や自然等）であり、楽しみながら知的好奇心をくすぐる様々な活動です。

西会津町は「日本の田舎、西会津町」として全国へアピールしていますが、児童生徒の自然体験は決して満足のいくものではありません。西会津のよさをさらに生かした学校経営を進めていきます。



学校経営あれこれ

「こどもたちと共に」

喜多方市立高郷小学校長 片平 智幸

私は、学校の役割は、1つ目に「友達と遊び、複数の人と関わりながら社会性を身に付けるところ」だと常々思っている。高郷小は、学区が広く家に帰ってからは友達と遊ぶということは少ない。学校にいる時には、思う存分友達と遊ばせる時間作りが校長の仕事と思った。

高郷小の子どもは、全校生の仲が良く、休み時間には校庭で鬼ごっこを楽しんでいる。1年生が鬼の時は、高学年の子がやさしく逃げ、捕まってあげる姿も見られる。微笑ましい場面である。



2つ目の役割は、「子どもたちの可能性を伸ばすところ」である。目標をもち努力して記録を伸ばす、それが喜びにもつながる。

そこで、県教委のなわとびコンテストを活用し、休み時間に子どもたちの記録を数え、その子の自己ベストが出せるように励ましながら記録に挑戦してきた。跳べる子も跳べない子も必死にがんばる姿を見て、とてもうれしかった。



そんな子どもたちと、私も一緒になって楽しめた1年だった。

市町村・地区便り

「ふるさとを愛し誇りに思う子どもを育てる」

北塩原村立さくら小学校長 富田 貴俊

本校は、教育目標に「ふるさとを愛し誇りに思う子ども」を掲げ、日々の教育活動に取り組んでいる。子どもたちは素直でかわいい。しかし、少子化の波は本校でも例に漏れず、令和2年度に100名だった児童数が今年度55名と半数近くに減少している。さらに、次年度にはついに複式1学級を抱える編制となり、今後の入学児童数も毎年一桁で推移していくと予想される。

本村は、「学校給食無償化」や「出産祝金」「子育て祝金」等、様々な子育て支援による手厚いサポート体制を構築している。さらに来年度からは村立幼稚園でも無償で給食の提供を開始する予定である。それでも、本校に今年度転入した児童1名は、新たな住民ではなく、「実家に戻って同居する」という理由なのである。この事態に、本村の未来を担う子どもたちを預かる学校ができることはやはり「ふるさとを愛し誇りに思う」心情を育てることではないかと思う。

また、本村には公民館事業として「学校の応援団」という組織があり、教育活動にマッチする地域人材をつなげてくれる。今年度は、新たに総合学習で子どもたちの学びに協力していただく米農家さんを開拓することができた。子どもたちは米作りを学ぶ中で、自分たちをサポートしてくれる地域の方の温かさや思いに気づくことができた。また、地区の遺族会の方から、戦争当時の学校周辺の様子や子どもたちの生活の様子を学んだり、公民館の方に講師をしていただき、地域に残る柏木城跡についての話を聞いたり、自分たちでも地域に残る歴史的な事物を見たり調べたりする中で、新たな発見などから地域を改めて見直し愛着を感じることもつながった。さらに地域の「北山薬師堂」については本校の保護者でもある松音寺副住職の方に学ぶことができた。

校長として自分ができることは、地域からの情報にアンテナを高くし、地域の協力者を増やし、子どもたちの学びのサポート体制の土台作りをすることだと思う。そして、感謝の念をしっかりと伝えることが大切である。耶麻地区の校長先生方もすでに実践していることとは思うが、私も微力ながら今後も努力していきたい。

話の小窓

「初心を忘れず」

喜多方市立上三宮小学校長 小野 明彦

先日、念願だった自動二輪免許を取得しました。以前からバイクに乗ってみたいという願望があり、その思いが沸々と大きくなり、ついに自動車学校へ。悪戦苦闘すること約二か月、念願の免許を取得できました。新しいことへの挑

戦はストレスもありましたが、非常に刺激的で楽しい日々でした。

考えてみると、このような新鮮な気持ちになったのは随分と久しぶりでした。ドキドキすることも、新しい挑戦も少なくなっている中で、免許取得を通じて自分自身を再発見することの大切さ、楽しさを感じました。

教員となって早30年余り。当然のことながら、教員は常に学び続けること、そして新しいことに挑戦し、自らも成長し続けることが重要です。今回のことで挑戦することの大切さ、楽しさを再認識できたことは非常に意義深いことでした。新しい知識や技術を学び、未知の世界に飛び込むことで、自分をさらに高めることにつながります。年齢に関しては人生の折り返し地点となっていますが、それは決して終わりではなく、新たなスタートラインに立つことと考えています。経験を活かしつつ、新たな挑戦を続けることで、これからの人生がさらに豊かになることでしょう。「初心忘るべからず」初心を胸に新たな挑戦を楽しんでいきたいと思います。

< 編集後記 >

今年は何年に無い積雪で、県内だけでなく全国各地から大雪に関するニュースが流れています。私は通勤で国道49号線や国道459号線を利用していますが、これまでに通勤できなかつたり、危ない場面に遭遇したりしたことはありません。私が運転する前には、道路は毎日しっかりと除雪されているからです。

「うちの主人は、年末からずっと、午前1時から除雪作業に行っているんです。帰りは午前7時・・・かなあ。」

給食の調理員さんが職員室で話していたのを聞き、「当たり前を支える人々の努力」を想像しました。

雪が裏磐梯に降り積もっている今日も、本校は当たり前のように職員が出勤し、児童が笑顔で登校し、朝の歌が校内に響き、児童と教師が共に授業をつくり、おいしくて安全な給食を食べ、みんなで一生懸命に清掃をし、スクールバスなどで下校します。

当たり前の一日に、どれだけの人々の努力が関わっているか…。当たり前に感謝する心は、見えないものを見ようとする想像力や、一つの事象からたくさんの考えを働かせる発想力を育てることもつながるように思います。

今年度「会報耶麻」を無事に発行できたのも、校長先生方はもちろん、関係する皆様のご協力のおかげです。心より感謝いたします。ありがとうございました。

耶麻地区小学校長会 広報部

北塩原村立裏磐梯小学校長 村松 泰二郎